

社会科学研究所 2018 年度夏季実態調査

北前船の足跡をたどる Part 2 —東北日本海側：秋田～山形～新潟—

行程記録

実態調査の趣旨

専修大学社会科学研究所では、2018年9月3日(月)～9月7日(金)にかけて2018年度春季実態調査「北前船の足跡をたどる Part2—東北日本海側」を実施した。本実態調査は、昨夏函館で解散となった夏季実態調査「北前船の足跡をたどる」(2017年9月10日～13日実施)の続編といえるものである。つまり、函館を出航した北前船が東北の日本海側を南下していくイメージである。

今回の調査は、秋田を出発点として、船が寄港した港町：秋田市、にかほ市、酒田市、鶴岡市、新潟市と回り、北前船の遺産がその後、各地域の経済や産業、地域社会にどのように関わったのか、現在の地域的・産業的特徴はどのようなものか、さらには現在全国で北前船寄港地の日本遺産認定が進み、対象地域での情報や観光整備が進められている中で、地域の再生や活性化にそれらをどのように活かそうとしているのか、東北日本海側地域についての理解を深めつつ、これらを多角的に捉えられればとの期待を込めて企画した。以下はこれらの行程の記録である(※文中の写真は全て筆者撮影)。

全体行程概要

9月3日(月)

- 12:40 秋田駅東口バス乗り場集合・バス出発
- 13:00 秋田市役所(産業企画課、観光振興課等)訪問、ヒアリング・意見交換
- 15:30 秋田市土崎みなと歴史伝承館 訪問、見学、ヒアリング
- 17:00 ポートタワーセリオン道の駅あきた港 見学
- 18:30 結団式(会場：秋田市内食事処)

9月4日(火)

- 9:30 TDK工場(本荘東工場、本荘西工場)訪問、見学およびヒアリング

- 13 : 00 TDK 歴史みらい館 訪問、見学（館内 TDK の来客施設にて昼食休憩）
- 15 : 00 にかほ市フェライト子ども科学館 見学
- 15 : 30 酒造飛良泉（創業 1487 年）訪問、見学、ヒアリング
- 16 : 30 頃 →山形県酒田市へ移動

9月5日(水)

- 9 : 00 酒田市資料館 訪問、見学、ヒアリング
- 11 : 00 平田牧場とんやにて昼食休憩
- 12 : 00 旧鑑屋 訪問、見学、ヒアリング
- 14 : 00 酒田米菓株式会社 訪問、見学、ヒアリング
- 16 : 00 日和山公園～山居倉庫等 見学

9月6日(木)

- 9 : 30 月山ワイン山ぶどう研究所 訪問、見学、ヒアリング
- 13 : 00 Sony セミコンダクタマニュファクチャリング株式会社 訪問、見学、ヒアリング
- 15 : 00 株式会社シンクロン 訪問、見学、ヒアリング
- 17 : 00 頃 →新潟市へ移動

9月7日(金)

- 10 : 00 北前船時代館旧小澤家住宅 訪問、見学、ヒアリング
- 13 : 30 亀田製菓株式会社本社工場 訪問、見学、ヒアリング
- 16 : 30 新潟駅前にて解散

実態調査の行程とその記録

第1日目：9月3日(月)

参加者のほとんどが 12 : 30 到着の東北新幹線こまちで参集し、12 : 40 過ぎにバスは最初の目的地秋田市役所に向かって出発した。

訪問地 1：秋田市役所

秋田市役所では、産業振興部産業企画課の船木貴博氏の挨拶に始まり、まずは観光文化ス

ポーツ部の渡部美和子氏からここ数年力を入れているというインバウンド促進事業をはじめとする秋田市の観光事業についての話をうかがった。観光客にいかにか長く留まってもらうかを課題とした秋田周遊のための交通整備、古くからある港を活かした大型クルーズ船寄港地としての可能性、国際線へのアピールなど、さまざまなアイデアが打ち出されていた。特に、北前船遺産によって先に日本遺産認定を受けた秋田市を含む 11 市町では、今後どのように寄港地域に還元して活かしていくことができるのかを検討中であり、また北前船地域で形成される「日本遺産推進協議会」への加盟地域 38 自治体（全国）において秋田市は酒田市と並んでその副会長の立場にあり（会長は加賀市）、こちらにも合意形成の難しさがあるという。独自の取り組みとしてクルーズ船を誘致し寄港回数を増やすなどの計画を持っている秋田市では、北前船遺産によって市の知名度が上がりつつある一方で、それをどのように観光振興へ活かしていくのかを模索されているようであった（写真 1、写真 2）。



写真 1、写真 2：初日秋田市役所での聞き取りの様子

次に、産業企画課雇用労働担当の山田直氏からの説明は、30 万都市秋田では一つの企業の撤退が地域にとっての大きなダメージになるという人口減少対策の話から始まった。就業人口 13 万人の雇用の内訳は主にサービス業である。企業のコールセンターがここ 10 年ほど有力な雇用受皿となっており、1 年目 200 人だった雇用が 3 年目に 800 人を超えた企業もあるという。そしてこれは本社とは別体系の地域限定正社員としての採用である。また、高齢者雇用に関しては 70 歳まで働くことができる割合は全国で 4 年連続 1 位とのことで、特にベテランは 65 歳以上でも来て欲しいという中小企業が多く存在するという。高齢まで働く場所があることは大事なことではあるが、その背後には少子高齢化や若年者の雇用が確保できないという人口減少の影響が見えてくる。

最後に、産業企画課 6 次産業・販売戦略担当の橋本春樹氏から、秋田市が 2012 年度から取り組んでいて、現在本格化しつつあるという 6 次産業化について話をうかがった。米に依存してきた秋田市では、そこから脱却すべくエンドウ豆やネギ、ダリヤなどの園芸作物に力を入れているのだという。特に廃校を使つての事業のために平成 30 年度の予算を大幅にアップしてい

る。ただし、作物の加工知識や販売に課題を持っているところが多く、商工業者の連携が必要で現在そのための柱作りを行おうとしている。

担当者ごとに質疑応答を挟み、メンバーそれぞれの関心について詳細を聞き取ることができたが、時間はすでにだいぶ超過しており、御礼もそこそこに、私たちは次の訪問先、秋田市の北前船関連事業の一つの成果であるという土崎みなと伝承館へと移動した。

訪問地 2：秋田市土崎みなと歴史伝承館＋ポートタワーセリオン道の駅あきた港

2018年の3月に開館したばかりという土崎みなと歴史伝承館は、入館してすぐの部屋が常設展示室になっていた。片側の壁面には土崎港の歴史と北前船の関係がわかる映像パネルの展示、もう片側の壁面には土崎街道絵巻（寛政年間完成、全3巻、31メートルにおよぶ）という古い絵巻の一部が展示されていた。古絵巻には、北前船が寄港していた頃の“土崎湊”の様子と現在残っている名所や地名とを比較して見るできるようになっている。雄物川河口に土崎湊を出入りする船、寺社や住居、商人や武士、農民たちが生き生きと描かれていた。伝承館の方の案内で、隣の曳山展示ホールに入ると、大きな曳山が展示されていて私たちを見下ろしていた（写真3）。土崎港曳山まつりは、土崎神明社祭の曳山行事であるが、このお祭りは京都の八坂神社に祀られているスサノオノミコトを招請して始められた祭礼とのことで、北前船によって運ばれた文化の一つといえる。特別に上映していただいた祭りのビデオでは、最後に怨霊と悪霊を封じ込めた曳山が縄がらみを切って全て解体され、翌年には新たな曳山が組まれるという意味づけや方法も祇園祭礼と同様であった。

伝承館の一番奥は空襲展示ホールになっており、昭和20年の終戦4日前の土崎空襲についての展示であった。ホール内には、旧日本石油秋田製油所の倉庫が被爆した形のまま移築され、当時が生々しく再現されていた。空襲の範囲を示すプロジェクションマッピングが、どのように被爆したのかをはっきりと示していた。土崎にこの日本石油秋田製油所があったことが町の被爆の要因となったようである。

歴史伝承館での見学を終えるとそこから目と鼻の先にあるあきた港ポートタワーセリオンへ移動した。タワー最上階が展望台となっており、市内から遠くの家まで360度の景色を見ることができる。タワー1階は、秋田の名産品である稲庭うどんやきりたんぼ、いぶりがっこのような食品からお酒や手作りの民芸品、そして新鮮な野菜まで扱っている「道の駅」である。ここで休憩を取った後、バスに15分ほど揺られると秋田駅前のホテルに到着した。結団式では、秋田の味覚を楽しみながら参加者同士の懇親を深めた。



写真 3：土崎港曳山祭りの山車

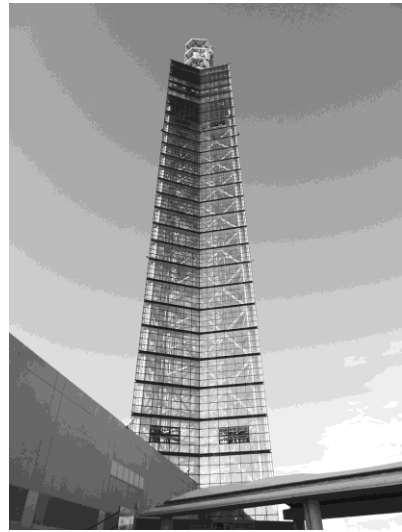


写真 4：秋田港のシンボル—ポートタワー

第 2 日目：9 月 4 日(火)

一行が乗車したバスは、秋田駅前のホテルを 8：25 に出発し、秋田中央インターから高速道路に入ると 9：30 には由利本荘市の本荘工業団地（その 4 分の 3 の敷地が TDK）内にある TDK 秋田株式会社の本荘工場東サイト（本社）に到着した。

訪問地 1：TDK 秋田株式会社（東サイト[本社]、西サイト）

TDK といえば、懐かしい音楽用のカセットテープが思い浮かぶかもしれない。そのテープの素材でもある磁性材料フェライトの事業化を目指して創設されたのが TDK であり、世界初のフェライトコアの製品化に成功した企業である。フェライトは 1930 年、東京工業大学の加藤与五郎博士と武井武博士によって発明された。そのフェライトの特許を秋田県仁賀保町出身の TDK 創業者斎藤憲三氏が譲り受けて 1935 年に東京電気化学工業株式会社を設立すると、フェライトの「工業化」に成功、その後世界へと広がる電子産業の礎を築くことになった。私たちが訪れた TDK 秋田は 2016 年に発足し、積層セラミックチップコンデンサ、RF フィルター、チップバリスタを主要製品としている。

本荘工場東サイトでは、この日ほぼ一日、私たちの案内やスケジュールの管理をして下さった菊地聖一氏（秋田総務部総務広報課長）に出迎えられ、まずは秋田地区の概要に始まり、素人にも分かりやすい工程映像付きの製品説明を受けた。その後、2 つのグループに分かれてロボットブースもあるピエゾ・プロテクションデバイス（自動車の燃料噴射システムや IT 機器、家電、産業機器に使用される保護部品）の見学と、コミュニケーションデバイス HML 工程の

見学となった。試作室では量産するための設備づくり、欠陥ゼロのものづくりを目指した産業用ロボットの試作が行われており、その動きを間近に見ることができた。ロボットには「休まなくて良い」という大きなメリットがある、という説明に一行はいちいちうなずいた。工場見学中もその後質疑でも参加者からはさまざまな質問が出され、気づけば時間オーバーの事態となるほど興味深い現場であった。

次に、本荘工場西サイトへバスで移動、まずは積層セラミックコンデンサについての説明を受けた。誘導体と内部電極を幾重にも重ねる技術が製造の基本であるが、現在の製品トレンドは高大容量化（高誘導率、薄層、多層化）と小型化である。現在そのコンデンサは10個であきたこまちの米粒1つ分のものや、海岸の砂一粒ほどの大きさなのだという。目に見えるのだろうかと思いつつ工場見学に出ると、その実物展示には拡大レンズが付いていた。見学では、製品の製造棟が材料の調合から検査包装まで（製造工程は14工程）長さ352mの直線ラインとなっており、これをまっすぐに歩いていった。廊下からガラス越しに見学できる工場内はとてもクリーンである。工場内の広さの割に人は少なかったが、それでも調整や点検などであろう、てきぱき立ち働く従業員の様子が見えた。受注生産による製造は、車載用に特化（70%～80%）しているとのことだったが、車の電装化が進む時代にそれはさらに進んでいくのであろう。会議室に戻った後も短い時間ではあったが、中国工場や業態転換、ライバル会社についての質疑応答が交わされた（写真5）。



写真5：TDKでの質疑応答

TDKの皆様に丁寧に見送られて向かった次の予定地は、同じくTDKの歴史みらい館であった。



写真6：TDK 本荘工場（東サイト）での記念撮影

訪問地2：TDK 歴史みらい館+フェライトこども科学館

TDKの本荘工場を出発してほどなく秋田県にかほ市に入り、そこから10分ほどで次の目的地 TDK 歴史みらい館へ到着した。まずは、本荘工場から同行いただいた菊地氏に、みらい館の隣にある TDK ゲストハウスに案内され、ゲストルームの一つである“大地”の間に通された。部屋は海に面して大きなガラス窓がはめられており、その向こうにはきれいに手入れされた庭と日本海が一望できた。ここには商談などで来るお客にも喜ばれているとのことで、接客の様子を一部垣間見た気分で丁寧に作られた料理を美味しくいただいた。



写真7：秋田なまりのペッパーくん



写真8：みらい館で意外にスリリングな“未来体験”

昼食後、一行が TDK 歴史みらい館に入ると、ペッパーくんが迎えてくれた（写真7）。秋田弁も話すことができるらしく参加者たちを和ませた。TDK 歴史みらい館は、TDK 創業 70 周年を記念して、創業者斎藤憲三氏の出生地であり創業期からの製造拠点となっていたにかほ市平

沢の工場敷地内に建設されたものである。その後 80 周年を機に TDK 歴史みらい館としてリニューアル開館している。内部は歴史ゾーンとみらいゾーンの大きく二つに分かれていた。歴史ゾーンでは、TDK の創業の経緯や企業としての歴史を、TDK が製造に関わってきた製品の現物とともに、時系列に知る・見るができるようになっていた。特に 4 大イノベーションであるフェライトコア、磁気テープ、積層チップ部品、磁気ヘッドの展示と説明では、参加者の世代によって懐かしさのツボは違うようであったが、各時代の技術を使用したラジオ、テレビ、ラジカセ、ウォークマン…などの現物展示に懐かしさを感じながら確実に技術が進歩してきたこと、私たちの生活や社会が大きく変化してきたことを改めて認識させられた。次のみらいゾーンでは、TDK が持つ技術が今後どのように私たちの生活を変えるのかを疑似体験しながら体感し（写真 8）、楽しむことができるようになっている未来空間であった。子どもに人気があるというのは全くうなずける。

その後、菊地氏の奨めで、みらい館にほど近いフェライトこども科学館を訪問することになった。急な訪問にもかかわらず、館長の佐々木孝人氏には丁寧に迎えていただいた。

フェライトこども科学館は、TDK 創業者斎藤憲三氏の生誕 100 年を記念してつくられた、にかほ市の建物である。フェライト磁石に関する展示が多数あり、他にもガラス張りの吹き抜けの建物に太陽や宇宙の惑星が浮いているオブジェや、巨大シャボン玉を作ることができる装置など、電気や機械、そして宇宙のしくみまで子どもたちが分かりやすく理解できるような展示が続いていた。2 階には斎藤憲三氏に関わる資料が所狭し並べられており、私たちはもっぱらその空間での見学となった。斎藤憲三氏はじめフェライトそのものあるいはその後の工業化に関わった人々の功績の大きさを改めて感じさせられるこども科学館の訪問であった。

訪問地 3：飛良泉 [日本酒製造業]

第 2 日目最後の訪問先は室町時代 1487 年（銀閣寺建立年）に創業（現在 26 代目）、日本で 3 番目に古いという酒蔵「飛良泉」であった。専務取締役の齋藤雅昭氏に案内と説明をいただいた。TDK とも縁があるとのことで、こちらへの訪問をつないでくださった TDK の菊地聖一氏とはお礼を述べて、ここでのお別れとなった。

齋藤氏のお話では、そもそも先祖は泉佐野（泉州）の出であり、応仁の乱の時代に戦乱を避けて秋田へ来て廻船問屋を営んだことが始まりだという。米どころの秋田で何かできないかと考えた先祖が「副業」として酒造りを始め、江戸時代後期に需要を伸ばし、明治に入って酒造りを本業とするようになったのである。現在の酒の製造は、季節雇用 30 年になる社員がおり、10 年前に杜氏（工場長）となって伝統の山廃仕込みを守り続けているとのことであった。



写真9：町の一角に広がる飛良泉本舗

写真9でわかるように、町の角地に広い敷地を持つ飛良泉酒造であったが、この中にある蔵は、遠戚に当たるTDK創業者の齋藤憲三氏宅にあった蔵を移設されたものとのことであった。

周囲の風景はのどかで空は広く、すぐ近くに海が見える。にかほ市はかつて北前船が寄港する塩越湊、金浦湊、三森湊、平沢湊の4つの湊を持つ地域である。往時の賑やかさを想像しながらバスに乗ると間もなく田園風景が流れ始める。この風景だけだとTDKでみたようなハイテクの先端のような電子部品が作られていることは想像しにくい、一方で室町の戦乱の時代から操業し続け、北前船の遺産のような飛良泉という古い蔵もあるまちである。そんなまちの対極的なものづくりを見るという貴重な経験を得た一日であった。バスは一路山形へ向かった。

第3日目：9月5日(水)

心配された台風も昨夜のうちに過ぎ去ってくれたようであった。朝から天気も涼しく穏やかで、一日酒田で過ごすこの日にはふさわしい天候となった。ホテル前を8:45に出発、3日目の最初の訪問場所である酒田市資料館はホテルからバスで10分とかからない場所であった。

訪問地1：酒田市資料館

館長の佐藤文彦氏にご挨拶をいただいた後、2階の展示室で酒田の歴史についてまずは参加者個々に見学をした。展示室内は古代から近代までの酒田の移り変わりがわかりやすく展示しており、折々の当時の道具や什器のような実物や模型などが多数展示してあった。特に、酒田を起点とした北前船に関わるものとして、最上川沿いの舟着場で出入りのあった品物が地図上で示されていたり、酒田湊で活躍した町人の出身地が全国地図で示されていたり（国内は遠くには播磨、海の向こうは渤海国まで）と目にもわかりやすく興味深い展示が数多くあった。廻

船問屋の酒田三十六人衆の組織と機能についても表でコンパクトに示されていた。また、酒田市民にとってはまだ近い過去である 1976 年の「酒田大火」についての写真や生活用品などの常設展示コーナーもあり、1800 棟が延焼し酒田市街地に広がった火災の惨事を今に伝えていた。

しばらくして同館調査員相原久生氏が、北前船をテーマに酒田を訪れた私たちのために、古い絵図を広げながら酒田港の歴史を中心とした説明をして下さった。もともと酒田は 1000 人程度が住む袖の浦というところにあったが（向酒田）、最上川の砂だまりがひどくなり、当時 140 人ほどしかいなかった現在の酒田の地（当酒田）へ 16 世紀中に 100 年ほどかけて移ってきたのだという。その間に町割が完成し湊へと発展、1672 年には河村瑞軒による西回り航路が開かれるのである。近代港湾化するのには明治 30 年代に入ってからであるが、その前も後も酒田港の賑わいと酒田経済の展開は先に見た全国からの舟船や人々によって長く興隆し続けたのである。

それほど大きな資料館ではないと思ったのだが、さまざまな時代とテーマにわたりつつ、それぞれに選び抜かれた貴重な資料展示でコンパクトにまとめられており、思っていた以上に充実感を得られた資料館訪問となった。

その後、次の訪問地との時間の関係で、早めの昼食を取るために「平田牧場」が経営するとんかつ屋「とんや」に 11 時半に入店した。本実態調査を企画した当初は「平田牧場」見学も考えており、酒田へ打診に出向いたのであるが、養豚の環境を乱さないためには見学は 7~8 名まで、という回答に今回はあきらめざるを得なかった。だが酒田に行くからにはせめて食事と店舗見学くらいは、ということで今回予定に組み込んだものの、時間も早い上に、揚げ物はちょっと…という人もいるかもしれない…との心配もあった。しかしそれは全くの杞憂であった。食後のテーブルの上の皿は見事に綺麗になっていた。臭みのない甘みさえあるお肉は美味しく食べやすく、無事参加者の胃袋に収まってくれたようである。

平田牧場は減反となった日本の水田を再生させるという目的も持って、「輸入穀物に頼らず、顔の見える生産者の方々の日本の米を使用する」（平田牧場しおりから）飼料米づくりのプロジェクトに取り組んできた会社である。これが生活クラブと結びつきその飼料米で育てられた豚が共同購入されることでその知名度を上げたことは有名な話である。

食事休憩を終えると、先の酒田資料館に戻るような形で、その近くの「旧鑑屋」へ向かった。

訪問地 2：旧鑑屋

そろそろ日差しが強くなった…と思った 12 時頃、旧鑑屋に足を踏み入れると、一瞬すーっとした。そして、風通し良く気持ちの良い広々とした屋敷内に通され、まずは学芸員の方から鑑屋についての説明を受けた。

旧鑑屋は酒田を代表する廻船問屋で、本姓は池田であったが、最上義光に鑑屋の屋号を与えられてから鑑屋惣左衛門と名乗るようになったという。酒田三十六人衆としても活躍した名家である。現在旧鑑屋は酒田市の施設であるが、平成元年まで人が住んでいたとのことで、現在21代目の当主は会社員だそうだ。建物は石置杉皮葺屋根（写真10）の典型的な酒田の町屋造りで、通り庭に面して十間程の座敷部屋が並ぶ。入り口の左手には美しい庭園があり、通り庭を突き抜けた先の裏戸口を出ると左手に土蔵もある。井原西鶴の『日本永代蔵』に鑑屋の話があり、家主惣左衛門の才覚にて家が栄えたという繁栄ぶりを記した箇所があるとのことで、その様子が記述された部分が、各座敷のふすまに小分けに貼り出されていた。そこで鑑屋は「北の国一番の米商人」と紹介されている。他にもおもしろい記述があった。「亭主（鑑屋の）、年中袴を着て、少しも腰を延さず、内儀は、軽い衣装をして、居間を離れず、朝から晩まで笑い顔して、なかなか上方の間屋とは格別、人の機嫌を取り、見過を大事に掛けける」



写真 10：青空に映える石置杉皮葺屋根



写真 11：三之間から見える南庭園

ちなみに、鑑屋がメンバーであった酒田三十六人衆とは奥州藤原氏滅亡の際、藤原秀衡の妹である徳の前を守って酒田に逃れてきた藤原氏家来衆のことである。彼らが後に住を構えて廻船問屋として港を管理し、財とともに酒田独自の（藩政にも組み入れられるほどの）自治組織を生み出して酒田湊繁栄の礎を築いたのである。常に36人で組織されていたわけではないようで、長い歴史の中でメンバーも入れ替わってきたという。

訪問地3：酒田米菓株式会社（オランダせんべいファクトリー）

酒田米菓という名前は、正直、耳にしたことがなかったのだが、米どころの酒田に行くのだからどこか米に関わる産業や訪問地はないだろうかと思んだところであった。創業は昭和26年、庄内に生まれ育った創業者が地元の米を使って“おせんべいづくり”を始めた。おせんべ

いという、分厚く茶色で醤油照りのものを思い出しそうだが、ここのおせんべいは薄さ(3mm)がウリ、基本はこんがりページェで塩味の、直径6cmほどの食べやすいものである。そしてこれが昭和37年に東北限定販売で発売されて以来、売れ続けている代表商品“オランダせんべい”である。私たちはこのオランダせんべいファクトリーの工場を見学した。

お米は地元庄内の飯米を100%使用し(他のおせんべいには庄内米以外の国内産も使用)、精米、焼き、包装まで全て自社工場で一貫製造しているのだが、この工場は全体の長さが545m、そのうち生地部、焼成部、包装部の工程だけでまっすぐ395mの長さがある(写真13)。特に生地の乾燥炉は日本一の長さであるという。写真撮影は禁止であったが、この長い廊下の工程ごとに付いている窓から製造の様子が見られるようになっていた。酒田米菓ではこのように見学ができるように造作した工場を観光工場と呼び、これもウリにしている。

観光部の方が工場案内に付いてくれたが、実は工場のせんべい焼き工程は朝7時に始まるので、私たちが訪れた14時頃にはほとんど最後の工程だけになっていた。働いている人たちの姿が見えなかったのは残念であったが、おせんべいの種類ごとに製造機械があり、昭和から現役で活躍する焼き釜、炒り機、気球の上部をひっくり返したような味付け機までさまざまな機械が次々と現れた。メンテナンスもさぞ大変であろうと思う。一行から多様な質問が飛び出し、案内役の女性を驚かせたが、ベテランの彼女はどの質問にも応じてくれたので、一行はただでさえ時間のかかる長い廊下をゆるゆると進んでいった。ちょうど焼成工程にくると、お待ちかね?の試食せんべいが用意されていた。焼きたてとのことで、初めて食すオランダせんべいのおいしさに驚いた。これが酒田市民のソウル・フードである。



写真12：製造工程に見入る参加者



写真13：長い廊下＝見学行程＝工場ラインの長さ

社研ペースの工場見学は予定を 30 分ほどオーバーしていたが、工場の出口まで来ると土産店が併設されたカフェに案内されたので、皆思い思いにお土産を購入し一休みした。その後迎えに来たバスに乗車すると、ちょうど 16 時過ぎに次の目的地である日和山公園に到着した。

訪問地 4：日和山公園～山居倉庫等

日和山公園の案内板には、公園が酒田市のシンボリック的存在であり、かつて酒田湊に出入りした船頭衆がここから日和をみて出航を判断したと記してあった。酒田港や最上川が一望できる展望広場には方角石が残っており、もう一つの小高い丘には白い瀟洒な六角灯台もある。さらに北前船にちなんだものとして、昨日の台風のせいか逆風にも一帆で進んでいくという帆は残念ながら下ろされていたものの、公園の大きな池には北前船の 2 分の 1 という模型船（日和丸）が浮かんでいた（写真 14）。



写真 14：北前船国内最大 1/2 スケールの模型船

現在の船舶を思い浮かべると「こんなに小さかったのか？」と思わずにもいられないのだが、北前船は「米 1 千石（150t）を積むことができる」という意味から千石船とよばれ（北前船史上最大の船は 2400 石積み）、1 回の航海で千両稼いだといわれるのだから侮ってはいけない…と思直した。千石船のある広場を見下ろす眺めの良い場所には河村瑞賢像が建っていた。北前船西回り航路の起点として酒田を整備した瑞賢は、最上川流域 15 万石の幕府直轄領の年貢米を人口が急増する江戸に速やかに運ぶために日本海側のこの航路を整備したという。私たちは、舟積み前の米を置く「御城米」置き場を示す河村瑞賢庫跡の（上から見ると）“米”の形をした記念碑を確認して日和山公園を後にした。



写真 15：山居倉庫群

この日の最後の見学場所は、宿泊ホテルのすぐ目の前にある山居倉庫であった。入り口で一旦解散とし、各々で自由に見学した。筆者はまず数々のメディア映

像で登場する 12 棟の土蔵造り倉庫群“裏”の櫓並木と石畳みを歩いてみた（写真 15）。倉庫は明治 26 年に建てられた米保管倉庫で、自然の力を利用した低温倉庫である。裏の櫓並木は夏の倉庫内の高温化を防ぐための昔の人々の知恵であった。現在もほとんどは倉庫として現役使用されているが、庄内米歴史資料館や観光物産館などとしても無駄なく利用されていた。倉庫群“表”の目の前には、川向こうが市街地となる新井田川が流れていたが、その岸に「小鶴飼船」という船が展示されていた。これは最上川舟運の物資輸送の船である。最上川は、最上義光によって開削や河岸設置の舟運整備が進められたが、その際に支流や船着場間の近距離輸送に使われたのが積載量 50 俵程度の「小鶴飼船」であった。長さ 13～15m、幅 2m の本当に小さな船である。北前船のような大きな船の回りには、このような船が多数往来しては活躍し、大航海を助けたのであろう。

第 4 日目：9 月 6 日(木)

第 4 日目は 8：25 にホテルを出発、酒田インターから高速道路に入って 20 分、さらに鶴岡本線に入ると 30 分ほどで山形県鶴岡市旭地区にある月山ワイン山ぶどう研究所に到着した。

訪問地 1：月山ワイン山ぶどう研究所

迎えてくれたのは、庄内たがわ農業協同組合の加藤智氏（営農販売部 月山ワイン・加工所所長）であった。パンフレットによれば、ここ朝日地区では昔から山ぶどうを取ってきては“どぶろく”をつくり、野良仕事後の栄養補給に飲まれていたほど人々にとって身近なものであったらしい。そして、この地域の自然の恵みである山ぶどうを活用して減反および出稼ぎ対策を企画された、という少し珍しい経緯を持つワイン醸造所である。1972 年に山ぶどうの果汁・ワイン加工を企画（当時の組織名称は朝日農業協同組合）、その後は山ぶどう苗木の生産を開始し、県外各地に研修生を送り込むなど合法的なワインづくりを目指した。紆余曲折はあったが、1979 年に期限付果実酒醸造免許を取得すると（「月山ワイン」誕生）、次の年には月山ワインの名で製造販売を開始、その後 1982 年には醸造免許は“永久”となり、山形県からも山ぶどうを転作特認作物として認可されるに至った。

加藤氏の説明によれば、ワインは流行の嗜好品なので取り残されないよう常に商業ベースに乗り、なにより山ぶどうの作り手である農家組合員の利益を確保できることが第 1 目標なのだという。組合員と合意形成の上の研究所（醸造所）であり、他のワイナリーよりも高値でぶどうを買い取っている（農協からはマイナスを出さなければよしとされている）。新規ワイナリーが増えている中でなかなか大変なことである。実際、用意いただいた資料には生産者の高齢化が深刻な問題と記してあった。それでもこれからの生産計画は、生産者数（栽培面積）も醸造

量も増やす予定である。ぶどう品種別に見ると 2017 年度実績では、146 名の生産者中、山ぶどう生産者は 57 名いた。今後の計画では、酸味が強くて生産が難しい山ぶどうの割合を少しずつ減じていく予定のようだが、それでも山ぶどうをなくすことはしないという。販売についても、国内需要人口が今後減少するのであれば、海外も視野に置かなくてはというが、加藤氏曰く海外の人たちが好むのは酸味の少ない甲州ぶどうとマスカットベリーA なのだそうだ。

ひとしきり話をうかがった後、ワイン醸造の工場見学となった。大きな醸造タンクが何台も並ぶ工場内では、タンクの上に乗って作業をする様子が見えた。さらに工場を出て、山ぶどう研究所の脇を流れる梵字川に架かる大きな橋を渡ると（写真 16）、旧国道 120 号線のトンネルを再利用した自然のワインセラーがあり、そこへ案内していただいた。トンネル内貯蔵庫は真夏でも 18℃を越えない天然のワインクーラーである。残暑とはいえ、やはり入ると少しひんやりと感じた（写真 17）。瓶で、樽で、タンクで、とさまざまな貯蔵の形でワインが並んでいた。



写真 16：醸造所とワイン貯蔵庫をつなぐふれあい橋
（突き当たりが貯蔵庫）

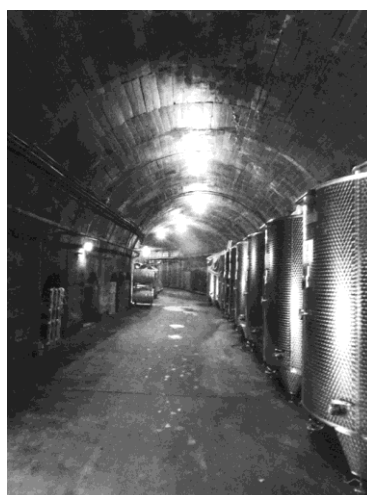


写真 17：奥が深いワイン貯蔵庫

再び橋を渡って山ぶどう研究所の建物に戻るといつものごとくかなりよい時間になっていた。研究所の 1 階は物産館となっていて、少しでも売り上げに貢献を…を口実に何本か買い求めるつもりでいたが、そのような暇もなく加藤氏にお礼を述べて月山ワイン山ぶどう研究所を後にして、鶴岡に向かった。

訪問地 2 : Sony セミコンダクタマニュファクチャリング株式会社

鶴岡駅の北側には鶴岡中央工業団地が広がっている。その駅にごく近い場所にあるのが今回訪れたモノづくり企業、半導体総合デバイスメーカーの Sony セミコンダクタマニュファクチャリング（山形テクノロジーセンター）である。

13時に一行を迎えてくれたのは佐々木崇策氏（山形人事総務部統括部長）である。もともと長崎出身の佐々木氏は、ほんの少し前までこの山形工場と連携して生産をしている九州二工場の一つ、長崎工場の勤務だったそうだが、実は専修大学出身、との紹介に至るとその縁に一同は大いに盛り上がった。おそらく本日の説明が佐々木氏に任されたのは私たちが専修大学の一行だったということもあったのかもしれない。

工場見学は製品の性質上許可をいただくことはできなかったが、私たちの研究所が理系ではないことには少し安心した様子であった（むしろ理系でない研究者がここで何を知りたいのか？という疑問はあったようであるが）。佐々木氏と、同じく人事総務部の荒木智美氏（係長）から会社の概要と製品の説明を受けた。Sony セミコンダクタマニュファクチャリングは、エレクトロニクス製品に不可欠な各種半導体の設計、開発、そしてその生産（量産）とカスタマーサービスを行う会社であり、本社熊本が 2001 年に設立されている。その社名からもわかるように、ソニーのエレクトロニクスビジネスをドライブしていると説明されていた。ソニーの独自開発によるイメージセンサーの世界シェアは現在 4 割を超えるという。山形テクノロジーセンターの主な生産品目はスマートフォン(カメラのレンズ部分)を中心とするモバイル向け CMOS イメージセンサーで、ソニー技術の重要な生産拠点となっていることが分かった。カメラもスマホも持ち込みを一切禁じられたのもよく理解できる。今後はメディカル分野（たとえば胃カメラ）や車分野（自動運転対応）など、ますますセンシングな領域での展開を想定してとのことであった。現在、山形の従業員は 720 名程度（女性 10%）である。説明の後、工場以外のところならば、と製品展示室や社員食堂を見学させていただいたのだが、若い従業員も多い印象を受けた。現在、山形テクノロジーセンターでは中途採用等でも積極的に人材受け入れを行っているようである。

訪問地 3 : 株式会社シンクロン

第 4 日目最後の訪問場所は、Sony セミコンダクタマニュファクチャリングと同じ鶴岡中央工業団地内に在る株式会社シンクロンであった。シンクロンは 1951 年に東京都品川区に設立された真空器械研究所に始まる（現本社は横浜市）。事業内容は真空薄膜形成装置やキーコンポーネントの研究、開発、設計、製造、販売、技術サービスなどである。もともと薄膜技術は持っておらずハコを作るところから始まった企業とのことであった。私たちが訪れた鶴岡工場は 1989

年に操業を開始、現在シンクロンの国内生産拠点となっている。操業開始の平成元年に工場が竣工してからこれまで5回もの増築を重ねてきたという。シンクロンには他に中国を中心とした海外拠点が5カ所あるが、海外生産拠点になっているのはシンクロン上海である（それ以外はサービス・営業拠点）。

まずは、今回の調査のために事前調整をしてくださった林崎正晃氏（総務グループ部長）と、この日一緒に対応いただいた大滝孝靖氏（ゼネラルマネージャー部長）から既述のようなシンクロン概要についての説明を受け、さらに私たちにとってはなじみの薄い「薄膜」とは何か、どのような生産技術を要するのか、といった初歩的なことについてもわかりやすい説明をいただいた。とはいえ、シンクロンは薄膜そのものを生産するのではなく、薄膜を形成する「装置」を生産する企業である。シンクロンから納入された装置で成膜された製品としては、身近なところでは、メガネレンズの反射防止膜やサングラスの加飾膜、スマホ表面の防汚膜、カメラレンズのカットフィルタ（可視光だけ取り入れる）、などである。特に光学真空薄膜形成装置ではトップクラスのシェアを持ち、その研究開発にも熱心であること、その技術が世界数十カ国へ輸出されていることがセールスポイントとして挙げられていた。またもう一つのセールスポイントとして強調されていたのは、ハンドメイド製造による製造ノウハウの蓄積についてである。この後の工場見学で私たちが目にしたのは、近年「工場見学」というとすぐにイメージされるライン生産ではなく、受注した製品ごとにブロックがあり、各ブロックに置かれた形も大きさもさまざまな真空チャンバー（真空環境をつくる容器）に作業員が数人ずつあらゆる角度から異なる役割で組み付いているハンドメイドの様子であった。量産ではなく受注設計生産のため、常に工場が動いているわけではない、ゆえに実態調査当日工場が全く動いていない可能性もある、と事前に林崎氏がおっしゃっていた意味を現場に来てようやく理解したわけである。その意味で当日の私たちは幸運であった。聞けば作業員はメカ担当と電装担当、成膜担当の三つのチームで構成されており、一台ずつ入れ替わって作業を担当しているとのことであった（現在鶴岡工場の製造担当従業員は60名程度で全従業員の5割弱）。時に本社ラインの開発メンバーが入ることもある。興味深い工場内に参加者からは質問が立て続いていた。会議室に戻ってからの質疑応答に、自動化はできないものなのか、という質問があり、「できないことはないが現在の価格維持が難しくなる」との回答であった。

鶴岡工場では製造事業の他に、その技術を活かした真空教室を開催している。成膜や装置に関する知識の提供である。ここには時には海外からの客も含めて毎回多くの参加者があるという。

今回の実態調査で見てきた他の工場とはまた趣の異なる工場見学と聞き取りを体験させていただいたお礼を述べてシンクロン訪問は終了した。



写真 18 : (株) シンクロンでの記念撮影

第 5 日 目 : 9 月 7 日 (金)

実態調査最終日、前日山形県鶴岡市からバスで二時間半以上かけて新潟への移動を終えていた私たちの朝は少しゆっくりめであった。まずは 10 時に予約をしていた市内の北前船時代館旧小澤家住宅を訪問した。新潟市内めぐりのおすすめコースに必ず入っている旧小澤家住宅だが、近辺は住宅街がひろがっていて思っていたよりも静かな場所にあった。

訪問地 1 : 北前船時代館旧小澤家住宅



写真 19 : 旧小澤家通り土間

小澤家は、江戸時代後期には米穀商を営んでいた家で、明治時代の初めに回船経営に乗り出している。その後も運送・倉庫業、回米問屋、地主経営、石油商とさまざまな事業に進出した新潟を代表する商家であり、また歴代当主は新潟の政財界でも活躍している（小澤家住宅リーフレットから）。小澤家住宅は、その小澤家の店舗兼住宅であり、新潟の典型的な町屋として新潟市から文化財指定を受けている建造物である。

最初に学芸員の方に、道具蔵を含めて公開されている全ての部屋を案内していただき説明を受けた。私たちがこの旧小澤家に入ったのは、かつて大店が店を構える通りであった上大川前通に面した店の間の空間か

らであったが、そのすぐ背後の最初に案内された部屋が仏間になっていて、入ればすぐに大きな仏壇が目についた。こんなところに？と少し驚いたが、小澤家が浄土真宗の門徒であったからという理由ではなく、仏間のような格式の高い部屋を店の近くに配するのが新潟の町屋の特徴なのだそうである。他にも座敷や茶の間には東郷平八郎や池田勇人らの書が掲げられており、小澤家の政治的な人脈の深さと広さがうかがえた。

全体説明の後、自由行動の時間を設けたので、参加者は各々で引き続き旧小澤家で資料収集や聞き取りをしたり、街中の見学に出かけたりした。筆者は、新潟では豪商の館として有名なもう一つの館、旧齋藤家別邸に足を延ばしてみた。旧齋藤家は明治から昭和初期に新潟の三大財閥の一つに数えられ、議員を歴任した豪商・第四代当主によって別荘として建てられたとあった。庭園と建物に不思議な一体感のある、風格のある建物であった。

再度旧小澤家に集合し、雨がひどくなる中、市街地から少し離れた亀田製菓株式会社に向かった。

訪問地 2：亀田製菓株式会社本社工場

亀田製菓といえば、多くの人にとって「柿の種」をはじめとする米菓を思い起こすに違いないが、沿革には水飴加工（亀田郷農民組合委託加工所創業）から始まったと記されていた。実際、1946年、戦後すぐの食糧難の時代に創業者は、女性や子どもの楽しみにもなり生活に喜びを与えられるお菓子づくりを目指して創業したという。その後甘味のお菓子が次々に登場したため、間もなく米を原料とする焼菓子製造となった。以来、米を素材とするお菓子を作り続け、1975年に国内米菓市場で売上日本一を達し、現在では国内米菓市場シェア 30%、柿の種をはじめとする主力ブランドをいくつも持つ企業である。

私たちが到着すると、まずは経営企画本部の鳥越敬氏と常勤監査役の近藤三千哉氏に迎えられた。間もなくすると、代表取締役会長 CEO の田中通泰氏が現れ、ご挨拶をいただいた。5分程の短い時間ではあったが、会社をどうしたら変えられるか、という現在田中氏が抱えているという会社の課題について述べられた。しかし、これは会社が切羽詰まっているという話ではなかった。むしろ働く人たちの環境が安定しすぎていて現状に満ち足り過ぎているという、見方によっては幸せな話でもあった。社内には共稼ぎが多く、2人で働けば十分な生活ができる。実家は農業なので子どもの面倒は親が見てくれる。こんなに良い環境の何を変える必要があるのか？従業員の反応はそのようなところであろう。会社の中の穏やかさも伝わってきた。しかし、田中氏は現状に満足する雰囲気には危機意識をお持ちのようであった。社内を変えるために外部からの人材を入れたり、朝の 30 分を face to meeting として従業員の意見交換の場を設けたりしているのだという。私たちに向けられた田中氏の率直な「お悩み告白」は、亀田製菓と



写真 20：工場見学に入る前の完全？防汚

という企業の一側面を垣間見たようで興味深くもあったが、その後、鳥越氏や近藤氏からうかがった、6 カ国におよぶ海外事業展開、新商品の開発、大阪“とよす”や栃木“日新製菓”のグループ会社化など、その事業展開ぶりは充実した内容という印象だけであった。田中氏の、あるいは社内における長期展開構想のもとに生まれる心配といえるのかもしれない。

ビデオ視聴でおおよその製造工程を頭に入れてからの工場見学となった。衛生管理上、私たちは頭の上から足先まで完全に防汚の態勢を取った（写真 20）。もちろん自身の防汚のためではなく、工場内の防汚のためである。

新潟には県内に 4 つの工場があるが、市内にあるこの亀田工場と白根工場が柿の種製造工場とのことで、私たちが見学したのは“小分けの柿の種”の製造工程だった。米生地が餅状態に練り上げられ、細い棒状になっていく過程から“柿の種”の形への成形、表裏が焼き上げられ、均一に味付けされていく過程を目の前で見せていただいた。工場内の人は少なかったが、機械の調整や様子見などをする従業員が快く挨拶を返してくれた。

工場見学から戻ると、商品開発から古泉明男氏（本部長）と、河治善樹氏（部長）の 2 名が加わり、質疑応答の時間となった。先の田中氏の発言に関する質問を始めとして人材や採用などの雇用制度に関する事、そして市場性等海外展開の実情、新製品開発まで、多岐にわたる質問が出される中で、こちらの提案ともいえる発言にも熱心に耳を傾けて下さる担当の方々の姿が印象的であった（写真 21、写真 22）。終盤に話題になった「米をどうやって活かすか」という昭和 30 年代の地域業者たちの話し合いと研究が実を結んで新潟に米菓づくりが根付いていったというお話は、地域再生の試み、という現代の話にもつながる興味深い話であった。



写真 21、写真 22：工場見学のあとの質疑応答の様子

最後に、亀田製菓から一人一人に大きな紙袋が手渡され、そこには亀田のさまざまな商品がめいっぱい詰められていた。家族に良いお土産ができたこと、貴重な見聞をさせていただいたことに感謝しつつバスに戻った。いつものように工場見学の後には時間に追われることになる。バスを少し急いでもらい、新幹線に間に合う時間に新潟駅に到着、ここで2018年度夏季実態調査は終了した。

謝辞

今回も行く先々で多くの方々に丁重に対応いただき、本当に充実した時間を持つことができた。

ご協力いただきました訪問先の関係者の皆様方にはこの場をお借りして深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

また、実態調査に先立って、2018年7月31日（火）に事前研究会を開催し、秋田県庁から佐藤良知氏（秋田県産業労働部産業政策課 政策監）をお迎えし「秋田県の地域と産業経済の動向」というテーマでご講演いただいた。実態調査に向けての事前の理解を深めることができたことをここに改めて御礼申し上げます。